

2020コロナの春



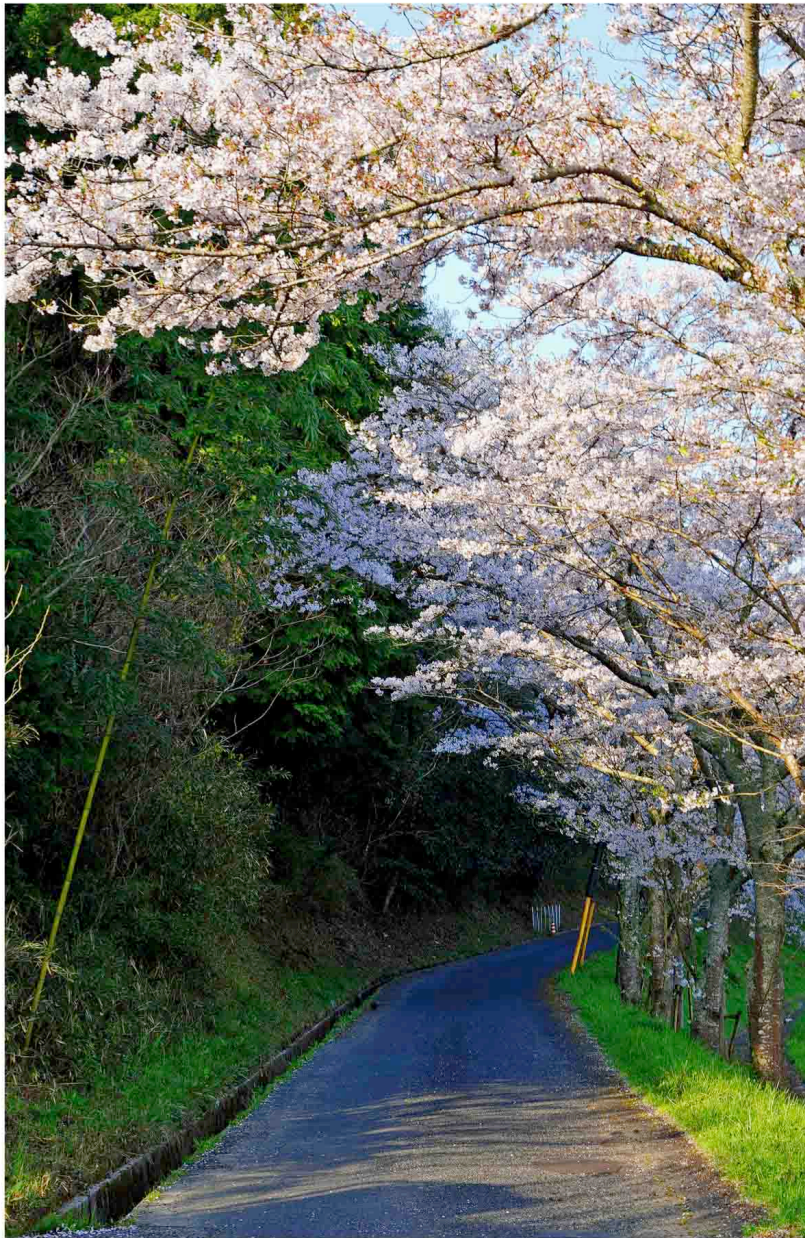
2018.7.6 小田川辺のこの一帯は大洪水に見舞われた。河川敷に張られた赤い網壁の中では今も河川の改修工事が続いている。江戸時代、ここは氾濫原だった。このため家屋は南北に続く山の麓のやや高い位置に建てるのが通常だった。それがいつの間にか川辺の平地に家が建ち、なす術も無く水没した。1年半後のこの春、ここに立つと水没して腐乱した大地の鶏舎の様な匂いがあたりに立ちこめている。下流の高梁川との合流点近くでは流路の付け替え工事が始まっている。しかし、それは土木屋の財源でしかない。これだけ人口が減っているのであれば氾濫原などにはもう住まないことだ。清澄な筈のあたりに漂う腐臭を嗅いでそう思った。



上流に向きを変えると菜の花の群落の向う、小田川に下る左右の山の斜面の奥に矢掛のシンボル伽藍山（292m）が青くたたずんでいる。赤茶けた河原は洪水前には化粧柳と竹林が思う様繁茂してまるで森の様な状態だった。増水した水はこの川辺の森の膨大な容積のおかげで堤防を越えたと言っても良い。洪水後真っ先にこの森が撤去された。巨大な鉄の鋏で森を千切る無数のショベルカーの動きは殺気だち、正に敵討ちの様だった。川辺森林の撤去予算を先送りした挙げ句の手痛いつけだった。



4月4日の朝、僕は家からここ迄ジョギングして来て、これから戻る。往復15kmのお気に入りのコースだ。東京では多摩川辺をよく走った。長い距離を走る気になる気力と体力に出会えることの嬉しさ。これはどこでも変わらない。この地ではそれに見事な景観を眺める嬉しさが加わる。



この一帯は奈良時代の右大臣、吉備真備公の祖先、吉備国の豪族下道(しもつみち)氏の領地だった。晩年奈良からこの地に戻った吉備真備公が琴を弾いて楽しんだと言う伝説の大岩(琴弾岩)が、桜並木の先の川辺に有り、その脇を走りぬげる。ほかにも様々な遺跡が有り、その白眉は公の祖母の青銅製の骨壺だ。江戸時代に山の麓の畑でみつきり、表面に施主である父の名(下道罔勝)が刻字されていた。ところで真備という町の名は洪水で広く知られる様になったがそれが吉備真備の真備であることは伝わっているのだろうか？



この桜は洪水前にはあまり目立たなかった。前後を深い川辺の森で囲まれて一帯の景色なんかは見えなかったのだ。それが洪水のおかげで突然一本桜としてデビューした。もう35年前、山梨の武田の里マラソンなるハーフマラソンに参加した折りに走りながら「鱈塚の桜」と言う一本桜を見つけた。以来何年も通って納得の姿を撮った。今ではその桜は結構あちこちの写真雑誌に登場する様になっている。それにはとても及ばない規模だが僕には2番目に発見した一本桜になった。「真備桜」とでも名付けようか？



一本桜の脇を抜けて進むと真備町から矢掛町に入る。町境に猿掛山（235m）と言う山が有る。その山頂に1205年に関東の武蔵の国出身の庄氏によって山城が築かれた。1184年の一の谷の合戦の折り、庄氏は平清盛の子重衡を生け捕りにし源氏の勝利に貢献した。その恩賞としてこの地の本舗地頭を命じられてやって来たのだ。それにしても関東からこの地に来るとは？と思ったが、当時関東にはまだ恩賞にふさわしい豊かな領地は少なかったのだ。このため、西漸武士と呼ばれる多くの武士が中国地方に土着することになった。その地で今化学処理工場の誘致問題が起きている（○印）。そんな工場を上流に作られては洪水の折りにどんな被害が有るか分からないということでまずは下流の住民から反対の声が上がった。地元では観光元年を宣言したり、アンケートで自然保護が言われたりしながらおかしいぞと言った声もあがりつつある。政治の力量が問われる問題だ。



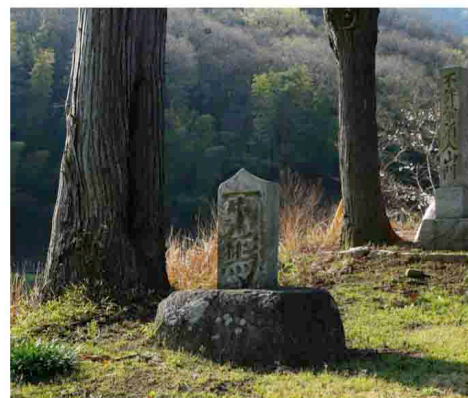
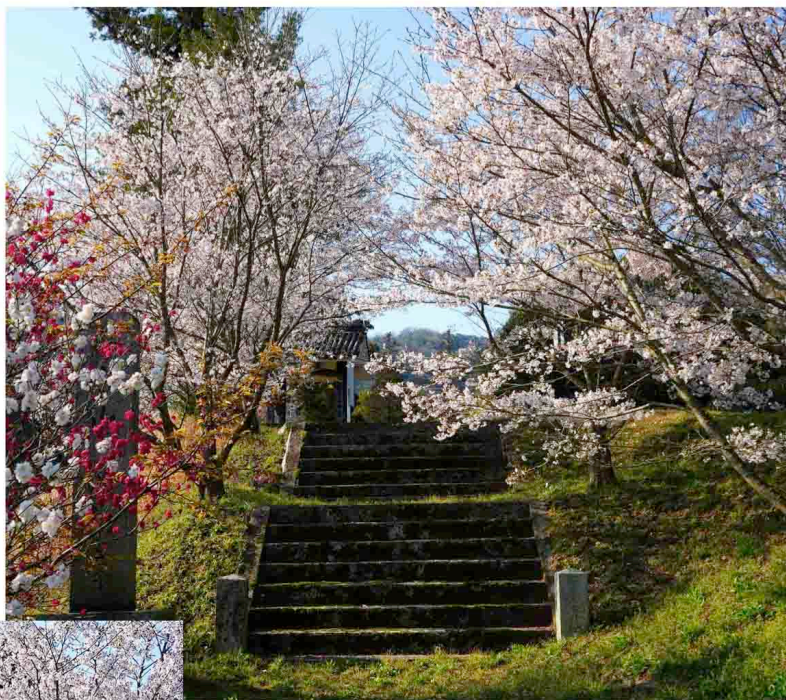
小田川を離れ南に向う。ほどなく大きな溜池（惣門池）が現れ、その東に白壁の長屋が続く。かつての大庄屋、福武邸だ。先祖は毛利家の家臣だったということだから1553年の毛利対庄氏の猿掛合戦の頃からこの地に土着したのだろう。1845年には庭瀬藩の小姓に任ぜられたという。敷地は1500坪近くも有り、南側の土塀には三角形の3つの銃眼が穿たれている。瀬戸内芸術祭の仕掛人であるベネッセはこの家の末裔である。



この春の桜の開花はいつもより10日ほども早かった。そのくせおだやかな天候が続き、散りもせずに4月初旬となった。おかげで遙照山の北の谷奥に有る洞松寺が桜花に埋もれた姿が長らく拝見できた。この日はまずは遠くから眺め、次第に寺に近付いてゆくことにした。花埋の寺だ。



この寺は舟木山洞松寺と呼ばれる。神功皇后の朝鮮半島出兵の折、この谷の松を船材として献上し、この地名を賜ったという。創建は天智天皇の時代の7世紀後半、一時衰退していたが1414年に猿掛城主、庄氏の帰依を受けて禅寺として中興された。2009年には曹洞宗専門僧堂の認可を受け、さらに2014年には海外の修行僧を受け入れるようになり、今では常時30名ほどの外国人修行僧を迎えている。



寺への参道の始まりは古い階段だ。
「下馬」の石標がある。



階段を登って進むと何のことは無い、右から車道が合流する。今では皆さん車で参拝するのだ。僕みたいにジョギングで参拝にやってくる人は滅多にいないだろう。でも、これが僕の修業だ。





曹洞宗の中での洞松寺の位置付けは永平寺、総持寺に次ぐのだと言う。
2016年に行われた開創600年の記念法要の折には永平寺の福山貫主が座主を務めた。
大般若経転読の様子に感心した思い出が有る。



早朝というにはやや遅く、朝の読経は聴けなかったが
さわやかな気分になれた。山門に戻り、階段を下り家に向う。
都合1時間15分。コロナの春の朝は普段と変わり無かったもの
の深く心に残るジョギングだった。

